

フランシス・ローウェル

——アメリカ産業革命初期の企業者——

水 原 正 亭

一 は じ め に

アメリカにおける産業革命は木綿工業において開始されたが、サミュエル・スレーター Samuel Slater によって始められたいわゆる「ロード・アイランド型」の木綿工場とボストン商人、フランシス・キャボット・ローウェル Francis Cabot Lowell によって始められた「ウォルサム型」の木綿工場とによって発展したことは周知のとおりである。⁽¹⁾一七九〇年にスレーターはアメリカに初めてアークライト式紡績機を導入し、工場制度を確立した。⁽²⁾ついで一八一三年にフランシス・ローウェルによって設立された「ボストン工業会社」Boston Manufacturing Company はスレーターが設立した工場に比較して近代的大工場という点で有名である。

このような産業革命期において企業者活動はその時代的・経済的・政治的・社会的背景さらには企業の経営政策と意思決定によって変化するものである。企業者活動は個々の企業家の意思決定のしかたによって多様であるが、ローウェルはどのパターンに属するであろうか。

本稿においてはボストン商人フランシス・ローウェルについて「ボストン工業会社」の設立を中心にサミュエル・スレ

ーターと比較することによってその企業者活動について検討したい。

- (1) この分類はアメリカ綿工業についてその資本形態からの分類である。「ロード・アイランド型」綿業と商業資本である「ウォルサム型」綿業との産業資本への転化をめぐって、つまり産業革命の担い手をめぐって土着小資本の成長による産業革命の遂行と両者による遂行という二説にわかれる。本稿において筆者は両者による遂行という立場からフランシス・ローウェルについて考察したい。
- (2) 水原正亨「アメリカ産業革命初期の企業者、サミュエル・スレーター」『彦根論叢』第一五〇号、および同「スレーター工場における労務管理」『彦根論叢』第一五八・一五九合併号を参照されたい。
- (3) 渡辺喜七「ボストン工業会社の技術革新」『経営史学』第七卷第二号、五八―九頁の注(1)を参照されたい。

二 フランシス・ローウェルとボストン工業会社の設立

フランシス・ローウェル⁽¹⁾(一七七五―一八一七)とボストン工業会社⁽²⁾については数多くの研究がすでに存在しているのでここではその概略にとどめ、彼の企業者動機について若干ふれよう。

ローウェル家はいわゆる「ボストン・アソシエツ」⁽³⁾の一員として一九世紀初期以来木綿工業を初めとする諸分野において活躍した。その中心人物フランシス・ローウェルは一七七五年四月一七日マサチューセッツ州のニューベリーポート Newburyport で生まれた。彼の先祖ピーサル・ローウェル Peasval Lowell は一六三九年に商人としてイギリスのプリズトルから移民し、祖父ジョン・ローウェル John Lowell (一七〇四―一六七) は教会の牧師であつた。父ジョン・ローウェル (一七四三―一八〇二) は一七六〇年にハーバード大学を卒業しニューベリーポートで弁護士をしていた。一七六七年セラム Salem のヒギンソン家の娘サラ・ヒギンソン Sarah Higginson と結婚したがサラは一七七二年亡くなり、ついでジョンは彼女の従妹のスーザン・キャボット Susan Cabot と結婚した⁽⁴⁾。彼女との間にフランシス・ローウェルが生まれたのである。フランシスの母スーザンは二年以内に亡くなったが一八七八年三番目にレベッカ・ラッセル・ティン夫人 Rebecca Russell Tyng と結婚した⁽⁵⁾。つまりローウェル家はヒギンソン家、キャボット家、ラッセル家という大商人と巨大な

親戚集団を形成することになり、これが後にローウェル家を工業活動に向かわせる遠因となった。一方ジョンは一七七七年にはボストンに移ったが、ボストン法曹界の中心人物となり一七八九年には連邦判事に任命されてジャッジ・ローウェルとして有名をさせた。⁽⁷⁾ 一方一七八四年にはボストンにおいて一族とともにマサチューセッツ銀行を開設し、ジョンはしばらくの間、出納長 Cashier として勤務した。⁽⁸⁾

フランシス・ローウェルはこのような環境にあつて、一七八九年ハーバード大学に入学して法律を専攻し、一七九三年卒業した。彼は数学において非凡な才能を有していた。⁽⁹⁾ 彼は卒業後ほどなくビジネス界に入った。当時貿易は繁栄期であり家系のつながりが最上とされる時であつた。フランシスの最初の事業は母の弟ウィリアム・キャボット William Cabot とのパートナーシップによる貿易業で、その間フランス、カナダそれにアメリカの沿岸諸州をくまなく旅行して知識を取り入れた。一七九八年には彼はハナ・ジャクソン Hannah Jackson と結婚し、義弟（ハナの弟）ジャクソン Patrick Tracy Jackson、貿易商アップルトン Nathan Appleton およびカッティング Uriah Cutting とパートナーシップを結んで貿易事業を拡大した。この事業は八隻の船舶を使用し、ジャッジ・ローウェルの財産を投資して行なわれた。⁽¹⁰⁾ 一八〇二年、ジャッジ・ローウェルは他界するが、その遺産を受け継いだフランシス・ローウェルは一八〇四年には彼の経営する醸造所に注目した強力な商社 J. and T. H. Perkins と提携した。一八〇五年にはローウェルとカッティングはブロード・ストリート⁽¹¹⁾の拡張に投資し、そこに倉庫を建設し、一八〇七年には道路工事や波止場の建設に投資し、銀行業、不動産業にまで手を広げた。⁽¹²⁾ またジャクソン家の三兄弟と東洋やスペイン貿易のためのパートナーシップを結んだ。このような貿易活動によって財をなした商人はアメリカ東部沿岸地方では数知れず、まさに黄金時代と呼ぶにふさわしかった。ローウェルはまだ三五才であつたけれども一八一〇年までに相当な財産を蓄積したようである。⁽¹³⁾

しかしながらこの繁栄も終りを告げようとしていた。英仏戦争による影響から一八〇七年には出港停止令 The Embargo

Act 一八〇九年には通商禁止令 The Nonintercourse Act が公布され英仏兩國とその植民地との通商が禁止された。さらに一八一二年の第二次米英戦争は貿易業に決定的な打撃を与え、商人は資本の投資を国内産業とくに木綿工業や羊毛工業に向け始めた。一七九〇年に始まるスレーターの木綿工場の成功は、これらの投資家の注目の的となった。こうしていわゆる「木綿工場熱」“cotton factory fever”が荒れ狂い始め、一八一〇年までにアメリカにおいて操業している工場はほぼ三〇〇も存在したのである。⁽¹³⁾

同年このような貿易の衰退期にローウェルはもともと病弱であったこととともに事業の上での気分転換を兼ねて家族を伴ってイギリスへ渡ったのであった。⁽¹⁴⁾ イギリスに到着してローウェルは各地を訪問したが、一八一一年の冬には静養にきた貿易商人というふれこみで、さりげない様子をしながらランカシャーの木綿工場を観察し、機械について熱心に質問した。注目すべきはローウェルがロバート・オーウェン Robert Owen によって経営されていたニュー・ラナーク New Lanark の大規模な木綿工場を訪問したことであろう。ローウェルはニュー・ラナークでオーウェンの家庭に滞在し、つづきに工場を観察したのである。⁽¹⁵⁾ かくしてボストンの商人仲間のアップルトンがエジンバラのローウェルを訪問したとき、ローウェルはアメリカに木綿工場を建設する決意を彼に披露し、アップルトンは支援することを約束したのであった。⁽¹⁶⁾ ローウェルは一八二二年、第二次米英戦争が勃発する直前に帰米した。

ローウェルはただちにボストンの商人仲間に計画をうち明けて出資を募った。それは紡績から織布まで一貫生産する授權資本金四〇万ドルの木綿工場であった。すなわちアメリカにおいて初めて力織機を備えたボストン工業会社がこの誕生することになった。一八一二年の終りごろからローウェルは義弟ジャクソンと力織機の製作に着手していたが、一八一三年二月二三日マサチュセッツ州議会によって設立認可され、同年夏、ついに力織機のモデルを製作することができた。しかし実用にはほど遠かったので、一〇月にアムズベリー Amesbury の機械工ポール・ムーディ⁽¹⁷⁾ Paul Moody を工場長

superintendent として招いた。一方九月には資金調達を開始し、一〇月には設立総会を開催した。一月にはチャールズ河畔のウォルサムに第一工場の建設が始まり一八一四年の夏の終りまでに工場の建設はほぼ完成し、秋にはついに力織機を完成したのであった。かくして二〇〇〇錘の紡錘と力織機とを備えた第一工場が設立され、一八一六年には三五〇〇錘の紡錘と力織機とを備えた第二工場が設立された。

最初の工場は地下を含めて五階建のレンガ造りで、地下には動力として水車が設けられ、機械工場 machine shop があり一階は梳綿等の紡績準備工程、二階は紡績、三、四階は織布とその準備工程のために用いられた。⁽¹⁵⁾ この工場の特徴は、(1) 授権資本金四〇万ドル（最終的には六〇万ドル）の株式会社であること、(2) 紡績から織布まで一貫生産体制を整えていたこと、(3) 取締役会を中心とした組織的な管理体制を確立したこと、(4) 寄宿者制度を取り入れた労務管理を採用したこと、(5) 新しい会計制度を取り入れたこと、(6) 綿布の販売にかんして selling agent に委ねるという販売管理制度を採用したと等であった。

一八一五年九月に初めて販売した布は少量であったがその販売高は次第に増加した。⁽²⁰⁾ 一八一五年には二、九八七ドル、一八一七年八月三〇日までの一年間では三四、四三二ドル、一八二二年まで年販売高は最高の三四五、〇〇〇ドルにのぼった。第二次米英戦争が終わると、外国から安価な綿布が流入したがボストン工業会社はそれに対抗できるほど安価に大量に生産できた。

フランシス・ローウェルは一八一七年に他界したが、息子六人中長男ジョン John A. Lowell は父の跡を継ぎ、一八二七年—一八四四年まではトレジャラー、一八四四—一八七七年までは社長に就任したのである。⁽¹⁷⁾

(1)(2) フランシス・ローウェルおよびボストン工業会社に関する文献には次のようなものがある。Victor S. Clark, *History of Manufactures in the United States*, 1929, New York, Vol. 1, Caroline F. Ware, *The Early New England Cotton Manufacture*, Boston, 1931; Vera Shlakman, *Economic History of a Factory Town*, Northampton, 1935; George S. Gibb, *The Saco-Lowell Shops*, Cambridge,

- 1930: Thomas C. Cochran, *Basic History of American Business*, Princeton, 1959, (邦訳松本勇訳『アメリカ的経営の史的発展』昭和三十七年、時事通信社) Robert K. Lamb, "The Entrepreneur and the Community," William Miller ed., *Men in Business*, New York, 1962; 井上忠勝『アメリカ経営史』(神戸大学経済経営研究所、昭和三十六年)、豊原治郎『アメリカ産業革命史序説』(未来社、昭和三十七年)中村勝己『アメリカ資本主義の成立』(日本評論社、昭和四一年)、平出宜道『フランシス・ローウェル—アメリカ資本主義史上の人々(2)—』(『経済セミナー』一九五七年八月号)、島羽欽一郎『アメリカにおける近代企業家の発生』(社会経済史学会編『近代企業家の発生』有斐閣、昭和三八年)、水原正亨『アメリカ産業革命初期における企業形態』(『産根論叢』第一四二号)、渡辺喜七『ボストン工業会社の設立と企業者動機』(『経済評論叢』第五卷第一号)、同氏『ボストン工業会社の技術革新』(『経営史学』第七卷第二号)。
- (3) ボストン・フロンティアの経営活動については T. C. Cochran and W. Miller, *The Age of Enterprise*, New York, 1949, pp. 71—72; T. C. Cochran, op. cit., pp. 42—43, 52—5, 63—7, (邦訳松本訳『前掲書』六〇—二七四—九、九〇—六二—) V. S. Clark, op. cit., Vol. 1, p. 545, 豊原治郎、前掲書『三六—五八ページ』を参照された。
- (4) 渡辺喜七『ボストン工業会社の設立と企業者動機』六七ページ、同氏『ボストン工業会社の技術革新』六三ページ。
- (5) (6) R. K. Lamb, op. cit., p. 97.
- (7) 渡辺喜七『ボストン工業会社の設立と企業者動機』六八ページ。
- (8) R. K. Lamb, op. cit., p. 98.
- (9) G. S. Gibb, op. cit., p. 5.
- (10) R. K. Lamb, op. cit., p. 98, ジャッジ・ローウェルは一七九三年以来の英仏戦争中二〇万ドル蓄積したといわれている。
- (11) G. S. Gibb, op. cit., p. 5, 渡辺喜七『ボストン工業会社の設立と企業者動機』六九ページ。
- (12) G. S. Gibb, op. cit., p. 6.
- (13) Ibid, p. 7.
- (14) キン G. S. Gibb によると、ローウェルの渡英は四つの理由からであった。一、彼も妻も病弱であった。二、当時病弱なボストンの資産家は静養と治療のためにイギリスへ出かけた。三、知識階級のうち苦手のものは静養先をイギリスに求めた。四、ローウェルは彼の階級および事業と異った雰囲気の中で子供の教育を成就しようとした。(Gibb, op. cit., p. 4)
- しかしギブが「この時期における長い外国旅行は商業上の動機がほとんどなかったということはないであろう。」(Ibid, p. 6)と述べているが、貿易に変わる事業を企てるための旅行であったということも推測できよう。ローウェルが「木綿工場熱」を見ていたであろうということ、また失敗はしたが母方の叔父がビバリーで木綿工場を経営したことも念頭におかねばならない。
- (15) 平出宜道、前掲論文『五一—二二ページ』。
- (16) G. S. Gibb, op. cit., p. 8, 渡辺喜七『ボストン工業会社の設立と企業者動機』七三ページ。
- (17) ホール・ムーディーのことは G. S. Gibb, op. cit., p. 12, を参照された。

(18) 渡辺喜七「ボストン工業会社の技術革新」一六六―七ページ。

(19) 井上忠勝、前掲書、七一―二ページ、豊原治郎、前掲書、二二―二ページ。渡辺喜七「ボストン工業会社の設立と企業者動機」一六三―五ページ。

(20) G. S. Gibb, op. cit., p. 26.

(21) V. Shlakman, op. cit., p. 39.

三 企業者としての評価

——サミュエル・スレーターとの比較を中心に——

ボストン工業会社を設立したフランシス・ローウェルを企業者として評価するために、次のような五項目の一般的な基準を設定する。⁽¹⁾すなわち、(一)資本調達、(二)技術導入、(三)組織の形成、(四)市場の開拓、(五)社会との関係、の五項目である。ただし、これらの基準はあくまでも本稿における分析のためのものであって、企業家の特徴がこの五項目に限定されるということの意味するのではない。

本節ではローウェルの企業者活動を、サミュエル・スレーターのそれと比較しながら考察したい。

(一) 資本調達

一八一三年資本金四〇万ドルの株式会社ボストン工業会社を設立しようとしたローウェルの冒険に対しては製造業に対する認識が高まっている時期とはいえ否定的な意見が多かった。キャボット家の叔父達は木綿工場ビバリー工場の失販という経験があり、⁽²⁾また当時貿易の停滞によって新しい投資先を探していた商人もこの大胆な計画にはなかなか加わらなかった。例えばローウェルがロンドン滞在中に最初に計画をうち明け、支援を約束した有力なボストン商人アップルトンでさえ一万ドルの出資要請に対して五、〇〇〇ドルをやっと出しただけであった。⁽³⁾またローウェルやジャクソンと義兄弟にあたるヘンリー・リー Henry Lee はローウェルの計画を「幻想的であり、危険に満ちた計画である。彼は狂っている」

と述べた⁽⁴⁾。しかしローウェルは義弟ジャクソンをはじめとする知人を説得して合計一〇万ドル確保して新会社をスタートさせたのである⁽⁵⁾。

これに対してサミュエル・スレーターの場合、最初はプロヴィデンスの商人モーゼス・ブラウンのもとに雇用され、しかる後にその蓄積をもって自分の工場を建設した⁽⁶⁾。その形態はパートナーシップをとり、自己資本の蓄積によって工場を新設していった。

ローウェルはボストン工業会社を株式会社組織にしたのであるが、マサチューセッツ州では一八三〇年に有限責任制を承認されるまで株式会社は無限責任制であった。したがって株式会社とはいっても近代的なそれとは程遠く、株式の公募もされずに資本調達がなされたのであるから、パートナーシップの場合よりも株式会社の方が株式引受人の数の多い点が多くなるにすぎなかった。結局、スレーターの行ったパートナーシップとあまり差はなかったと考えられるのである。

(二) 技術導入

一七九〇年、当時ジュニー紡機より優れた紡績機が存在しなかったアメリカに、大量に糸を生産できるアークライト型紡績機を導入したのはスレーターであった。スレーターの成功によってたちまち近隣諸州に紡績工場が数多く建設されることになった。さらにスレーターは一八〇三年にはイギリスから第ジョンを呼びよせ、ミュール紡績機を導入した。スレーターの行った技術革新は何もないと言われているけれども、これらの機械を導入した点でアメリカに対するその貢献度は測り知れないものがある。

ローウェルも力織機を導入した点でスレーターと比較して遜色がない⁽⁷⁾。スレーターがウィルキンソンの力を借りたようにローウェルもポール・ムーディの力を借りた。しかしローウェルの数学的才能は当時の数学者が賞賛しているほどであった⁽⁸⁾、それを機械製作に応用した。この力織機はイギリスのミラー型の織機に近いといわれ、最初から広幅の綿製品の生産

を目的としていたのでサイズが大きかった。⁽⁹⁾ 力織機の導入は生産の速度をあげ、婦女子一人で二台の力織機を操作でき、一八一七年五月―八月には三三人の織布工が五八台の力織機を操作しているのである。⁽¹⁰⁾ つまり生産性が向上し、スレーターが前貸制度で織布を行った場合のヤード当りの賃金の $\frac{1}{4}$ に切り下げたのであった。⁽¹¹⁾ かくしてその経済効率が高かったのでローウエルの力織機はその後ニューイングランドの綿工場に採用されてついには手織機を駆逐するに至るのである。

(三) 組織の形成

株式会社ボストン工業会社の経営組織⁽¹²⁾の中心は取締役会であった。第一回の株主総会で、ローウエル、ジャクソン、アップルトン、ソーンダイク Israel Thordike Jr. ロイド James Lloyd の五人が取締役に選出され、ジャクソンはトレジャーラーに任命された。トレジャーラーは高額の給料を支給されて管理業務に専念した。トレジャーラーの下には工場長 (superintendent or factory agent) がいて、工場内の全従業員の管理、職長 overseer の指揮監督、機械や建物の建設を担当した。工場長の下には各部門の職長が配置され各部門の労働者を訓練し監督したのである。⁽¹³⁾

これに対してスレーターの場合はスーパーインテンデント以下の組織を有するにすぎずオーナーがスーパーインテンデントを兼ねている場合が多かった。ボストン工業会社ではさらに販売組織たる selling agent が形成され労務管理に寄宿舎制度が採用された。しかしこれらの組織はローウエルの考案に負っているかどうか不明である。彼は創立以来機械工場において機械の製作に取り組みジャクソンがトレジャーラーとしてその経営能力を発揮したからである。⁽¹⁴⁾ ただローウエルがジャクソンに相談をうけているであろうということは寄宿舎制度等をみても容易に推測できる。

(四) 市場の開拓

ボストン工業会社は selling agent なる独立の市場販売機構をもち、これを通じて自社の生産品を商品化していた。⁽¹⁵⁾ こ

の機構には多数の委託販売人たる *agent* が存在した。スレーターの場合、最初はアーミー・ブラウンを利用したがついに商社を買収し直接管理する方向に向かった。⁽¹⁶⁾ 後にボストン工業会社に出資した人々を含めたボストン・アソシエツツは自己の綿業会社の製品の販売を第三者に委ねずに自己の販売会社において独占的に販売した。⁽¹⁷⁾

(四) 社会との関係

企業の第一目的が利潤追求であることは当然であるが、しかしそのみであらうか。そうでないところに企業者活動の特徴が見出されるのである。ローウェルは貿易活動の停滞による投資のはけ口としてのみこの綿工業に投資したわけではない。アメリカ経済の発展を願う愛国心にもとづいて行動を起こしたのであった。⁽¹⁸⁾ かくして第二次米英戦争後の不況下においてロード・アイランド型綿工業の不況を救済するために、ローウェルはアップルトンと共に新しい関税の期間について話しあう目的でポータケットを訪ずれ、綿工場主に力織機の導入を説いているのである。⁽¹⁹⁾ そのために、ローウェルは特許機械の販売を行なったのであった。⁽²⁰⁾ これは特許料を取ったけれども特許の解放につながった。スレーターも特許を取らず、アークライト式紡績機の普及は経済の発展に役立つこととなった。ボストン工業会社の労務管理は寄宿舎制で知られているが、それは労働力として農村の婦女子を雇用するために始められたのである。もちろんローウェルがイギリス滞在中にロバート・オーウェンの工場を見学した時にその発想はなされたと思われるが何よりもまず宗教上の理由つまりピュリタニズムと結びついている。⁽²¹⁾ 当時のニュー・イングランドの農村はピュリタニズムの影響が強く、遠く親元から離れて生活することは道徳的墮落につながるという風潮が強かった。そこで女工に厳格ではあるが豊かで楽しい寄宿舎生活をさせるとともに、ピュリタニズムによる宗教的教育をほどこし、地域社会に奉仕しようとしたものであった。スレーター⁽²²⁾ の場合は一七九三年日曜学校を開き子供から大人まで教育するようになった。また子供を多く雇用したが、訓練をうけたものが独立して自分の工場を持つものも多く、彼の工場は機械工と職工のメッカとよばれてニュー・イングランド経済

に大いに役立ったのである。ボストン工業会社において雇用された機械工もスレーターの訓練した機械工が多かった。⁽²⁰⁾
 以上のように、スレーターの場合も、ローウェルの場合も地域社会に貢献しているのである。

- (1) 前掲拙稿「アメリカ産業革命初期の企業者」サミュエル・スレーター」のなかで、シムヘンターおよびコールの考える企業者概念をもとにスレーターの企業者活動を評価したのであるが、本稿においてもそれと同様の分析方法を用いたい。
- (2)(c) G. S. Gibb, op. cit., p. 9.
- (4) 渡辺喜七「ボストン工業会社の設立と企業者動機」ハーバード。
- (5) ボストン工業会社の出資者と出資金については次の表の通りである。

ボストン工業会社の株式応募者ならびに払込み資金

氏 名	1813年 9月4日 応募 株数	1813年9月 4日 応募金額	払込み 資金 (1815年9月 まで)	第2回 募数 (1817年7月 まで)	払込み 資金 (1817年7月 まで)	第3回 募数 (1818年5月 まで)	払込み 資金 (1818年5月 まで)	合 計	発起人との関係
Patrick T. Jackson	20	\$20,000	\$20,000	20	\$20,000	50	\$48,000	\$88,000	ローウェルの義弟
Francis F. Lowell	15	15,000	15,000	15	15,000	30	31,000	61,000	ジャクソンと義兄
Charles Jackson	10	10,000	10,000	10	10,000	30	29,500	49,500	P. ジャクソンの兄
James Jackson	5	5,000	5,000	5	5,500	10	10,000	20,500	P. ジャクソンの兄
Israel Thorndike	10	10,000	10,000	10	10,000	20	20,000	40,000	知人
Israel Thorndike Jr.	10	10,000	10,000	10	10,000	20	20,000	40,000	〃
John Gore	10	10,000	10,000	10	9,000			19,000	友人
Nathan Appleton	5	5,000	5,000	5	6,500	16	16,000	27,500	ローウェルのバー トナー
Uriah Cutting	5	5,000	3,400	3	1,500			4,900	ローウェルのバー トナー

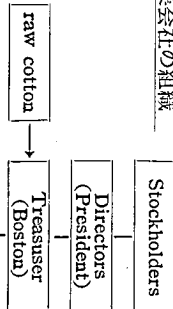
James Lloyd	5	5,000	5,000					5,000	友人
Benjamin Gorham	3	3,000	3,000	3	3,000	6	6,000	12,000	ローウェルの義兄
Warren Dutton	2	2,000	2,000	2	2,000	4	5,500	9,500	ローウェルの義兄
Paul Moody			1,600	4	4,000	17	17,000	22,600	雇用した機械工
G. Lee					500			500	
合 計	100	100,000	100,000	97	97,000	203	203,000	400,000	

1. 出所 ポストン工業会社の記録第1、第2、第10巻より作成。

2. 渡辺喜七「ポストン工業会社の設立と企業者動機」82—8ページより引用作成。

- (6) スレーターの資本調達については拙稿「アメリカ産業革命初期の企業者」サミュエル・スレーター」九六、一〇六ページを参照された。
- (7) ポストン工業会社の技術革新は最初、力織機だけに限られ、紡績機はすべてスレーター式のものが入された (G. S. Gibb, op. cit., pp. 28—32)。これらの紡績機が改良されて他社へ販売されるようになるのはローウェルが他界してからムーディーの努力による。これらの技術革新については (G. S. Gibb, op. cit., pp. 33—39, 渡辺喜七「ポストン工業会社の技術革新」七三—八ページ) を参照されたい。
- (8) G. S. Gibb, op. cit., p. 36.
- (9) 渡辺喜七「ポストン工業会社の技術革新」六八—九ページ。
- (10) 同氏、同論文、六九ページおよび七二ページの注 (28)。
- (11) 同氏、同論文、七〇ページ。
- (12) 同氏、同論文、六二ページにポストン工業会社の管理組織が図示されている。引用してみよう (次頁参照)。
- (13) 同氏、同論文、六〇—二二ページ。
- (14) G. S. Gibb, op. cit., p. 23.
- (15) Ibid, pp. 83—90, 92—3, 183—92, 豊原治郎「前掲書」二二二ページ。
- (16) 拙稿「アメリカ産業革命初期の企業者」サミュエル・スレーター」九一—五ページ参照。
- (17) 中村勝己「前掲書」二二四—五ページ。
- (18) 渡辺喜七「ポストン工業会社の設立と企業者動機」七六—七ページ。
- (19) 同氏、同論文「七二ページ。G. S. Gibb, op. cit., p. 26.
- (20) Ibid, p. 36.

ボストン工業会社の組織



Bleaching Factory (Waltham)		Superintendent (Waltham)		Selling Agent, B. C. Ward (Boston)	
Machine Shop	Carding	Spinning	Dressing	Weaving	
Overseer	Overseer	Overseer	Overseer	Overseer	
Mechanists	Operatives	Operatives	Operatives	Operatives	

1. 出所: Boston Manufacturing Company, Manuscripts, Vol. 1, Vol. 2, Vol. 80, Vol. 187 より作成。
2. 渡辺邦七「ボストン工業会社の技術革新」61ページより引用。
- (21) 平出宣道「前掲論文」五三ページ。
- (22) 拙稿「スレーター工場における労務管理」二〇一ページ。
- (23) G. S. Gibb, op. cit., p. 54.

四 結 ぶ

本稿においてアメリカ産業革命初期における木綿工業企業者としてフランシス・ローウェルをとりあげて検討した。ローウェルの設立したボストン工業会社は、スレーターに始まるロード・アイランド型の紡績工場よりもはるかに近代的な大資本の工場であるといわれているが果してそうであろうか。とりわけ資本金が問題である。払込資本は一〇万ドルにすぎないのに授權資本金四〇万ドルが、あたかも設立時の調達資本の如くに扱われているのである。一〇万ドルの資本とい

えば、ロード・アイランド型の工場の平均資本金の二、三倍にすぎず、調達方法も公募ではないのであるからパートナリシップとなんら変わらないのである。第一工場、第二工場の紡績鍾数がそれぞれ二、〇〇〇、および三、〇〇〇鍾であるから、紡績だけを比較すればスレーターの工場と等しいかそれ以下である。またニューヨークやペンシルバニア、それにイギリスにはそれ以上の工場が多数存在した⁽¹⁾。

その他の点ではロード・アイランド型の工場よりもボストン工業会社の方がより近代的であるといえるが、はるかに近代的であるとは言えないであろう。例えば技術の導入という点では力織機を開発したけれども紡績機はスレーター型の機械を購入して使用しているのである⁽²⁾。

しかしながら、会計制度、取締役会、販売機構、労務管理など近代的な経営につながる新しい試みがなされている点では不完全とはいえ評価して支差えないであろうし、力織機の導入による織布の一貫生産工場の出現は画期的である。

ローウェルの企業者活動は労務管理などの経営面にも及んでいるが、最も強調さるべき点は力織機の制作という技術面であろう。それは紡績から織布まで一貫生産体制の工場の設立こそ最も重要な点であるからである。このような観点からローウェルは、スレーターと同様、技術者が企業創始者となる典型を示していると考えられるのである。

以上のように本稿では、フランス・ローウェルについての考察を主目的としているので、ボストン工業会社についてはローウェルが他界する時点までほんの数年しか取扱っていない。ボストン工業会社はその後驚異的に発展し、ボストン・アソシエツツによる同型の木綿工場が輩出するが、それはとりもなおさずボストン工業会社が先駆的な役割を十分に果たしていたことを物語っている。

(1) G. S. Gibb, op. cit., pp. 23-4.

(2) Ibid, pp. 24-6. ¹一八十七年以後には、ポール・ムーディーの改良が成功し、新しい紡績機械を開発・販売するようになる (G. S. Gibb, pp. 36-45).